

『王様一直線！』

著: ゆらひかる

ill: 大和名瀬

大学四年になって就職活動も追い込みに入った頃、和史は黒澤の告白(セリフ)に驚かされた。

「やっぱり、俺は自分で会社を興(おこ)すよ。人に使われるのは性(しょう)に合わないからな。ほら俺って、社長が向いてるだろ？」

あっさりそう言った彼に、しばらく和史は、ぽかんと口を開いていた。

「なに言ってんだ！ おまえもう、白(はく)王(おう)堂(どう)に就職決まってるじゃないか!!」

テレビCMも手がける、業界最大手の広告代理店だ。黒澤は持ち前の自信とセンスで一発採用されたのだ。

大学時代、黒澤と和史は同じデザイン・スタジオでアルバイトをしていた。そこで、こき使われてなんでもやらされたのだが、おかげで仕事のおもしろさや、ノウハウを覚えることができた。

白王堂に入れば、黒澤が以前からやりたいと言っていた、大きな仕事が手がけられるのに……。

「そうだけどさ～、おまえと別々になっちゃうだろ」

「バカッ！ そんなこと関係ない！」

つまらなそうに言った黒澤に、和史は大声で叱りつけた。

一緒に受けた和史は、二次試験で落とされた。それでも、黒澤を祝福していたし、がんばってもらいたいと思っていた。

その後、やっと自分も中堅の商社に就職が決まって、ホッとしていたところだったのに…。

「おかしなこと考えるなよ。これからは遊びじゃない、仕事なんだぞ！」

思いきり頭に血が上って、和史は目の前の男を怒鳴りつけていた。

就職困難なこの時代に、数々の難関をくぐり抜けて、トップレベルの会社に入れるのだ。

この幸運を手放したら、黒澤は一生後悔するはずだ。

「いいか、これからは社会人としての自覚を持てよ。学生気分は卒業するんだぞっ」

大学のキャンパスの片隅で、和史は顔を真っ赤にして、息が切れるまで叱り続けた。

「三月から、始めるけど…」

「はあっ？」

「俺のデザイン・スタジオさ」

まだ肩で息をしている和史に、黒澤は顔を近づけて、にっこり笑った。

「もちろん、おまえも来るよな」

そう黒澤に聞かれたとき、和史は彼の切れ長な目を見つめたまま、考えるより先に、「うん」と頷いてしまった。

いま考えても、どうしてあのとき承諾したのか、自分でもわからない。まるで黒澤に

魔法をかけられたようだった。

ずっと腹の立つ奴だと思っていたし、顔を合わせても、怒ってばかりなのに……。

それからずっと、和史は黒澤と一緒にだ。

バイトをしていたときは、彼と肩を並べてデザイナーとしてやってきた。でも、いまの自分達の会社では、経営を任されている。

それはそれで、やり甲斐がある仕事だと思うし、納得もしているのだが……。

「なあ和史、どうだこの部屋」

黒澤がそう言って、いまプリンターから出てきた不動産チラシのコピーを差し出す。

「ああ、いいデキだな」

黒澤は仕事が速い。服部より二倍は速く、きっちり仕上がっていた。

「そうじゃなくてさ、このマンションの間取りいいだろ？ 最上階の三LDKは、けっこう広いしさ」

「うん、いい部屋だな」

「だろ～？ ここから近いし、一緒に住まないか？」

「はあっ？」

デスクに両手をついて言った黒澤に、和史があきれて眉をひそめる。

「だって俺んとこ会社から遠いし、帰るのめんどろなんだよ。いまだって週の半分は、おまえんちに泊まってるし～」

「それは、おまえが酔っぱらって勝手に転がり込んでくるだけだっ」

「まあ、そうなんだけどさあ」

首の後ろを押さえて、黒澤がぼやく。

「会社以外でも、毎日おまえのめんどろみるなんて冗談じゃない。それに、女を引っ張り込まれるのも嫌だ」

「俺、おまえんちへ女連れてったことないぞ」

「じゃあ、寝言で言った『みきちちゃん』て誰なんだ!？」

あのと黒澤が口にした女の子の名前を全部あげてから、ムキになっている自分にハッとして口を押さえた。

「覚えてないな～」

黒澤が頭を搔いて苦笑する。

「やきもち焼くなよ。俺これからは絶対浮気しないからさ、いいだろ？」

彼は甘い声でそう言うと、座っている和史の肩に腕を回した。

「やきもちじゃない！ おまえが誰と付き合おうが、おれには関係ないっ!!」

和史はつい声を荒げてしまった。やきもち焼きの“彼女”をなだめるような黒澤の口調にも、無(む)性(しょう)に腹が立つ。

「じゃあ何も問題ないだろう？ なっ、俺と一緒に暮らそうぜ」

怒っているのに背中から抱きすくめられて、和史はそっとため息を漏らした。

——…どうして、おまえは…おれに、こんなことするんだよ……。

自分を抱きしめる腕が温かくて、ともすれば抱え込みたくなる。

「和史、おまえ、いい匂いがする」

うなじに触れた唇に囁かれて、瞬間的に頬がカーッと熱くなった。

「勝手にバカ言ってるよっ。さあ、さっさと片づけて帰るぞ」

わざと大声を出して立ち上がると、和史は黒澤をデスクに押し戻した。

「え～、和史冷たいぞー」

唇をとがらせる男を無視して、和史はチラシのコピーとデータを、さっさと自社の封筒にまとめる。

——黒澤にとって、おれは、いったいなんなんだろう……？

机上に封筒を戻しながら、和史は唇を結んで考えていた。

スーツの上着に腕を通す黒澤の広い背中を眺めると、頼もしく思える反面、彼に対して息苦しいコンプレックスを覚える。

今度のフィリ化粧品企画は、大手広告代理店に入社しなければ、関われないような大きな仕事だ。でも黒澤は白王堂を蹴ってから、たった五年で、この仕事をもぎ取ってしまった。

彼には、きっと夢を実現できる潜在能力があるのだ。世間や人の波を悠々と渡っていける、独特のオーラもある。それは一般人のいう努力などとは別の次元のもので、黒澤は最初から強者で勝者になるべく、能力を持って生まれているのかもしれない……。

和史を置いて、彼は軽々と高みに上っていく。手を伸ばしても、自分だけが取り残される。それが悔しいのに、目が離せない。どうしようもなく黒澤に惹かれてしまう。

彼についていて、自分には叶(かな)わない素晴らしい仕事に関わってみたい。

でも…、目を逸らして逃げ出したくなる時もある。

それはすべて黒澤の実力で、自分はただそれを讃(たた)えることしかできない。

相反する感情を持て余して、和史はときおり自分でも混乱していた。

でも、ひとつだけ、わかっていることがある。黒澤とスタートラインが一緒でなかったら、きっと和史は、こんなふうには落ち込むことはなかっただろうということだ。

本文 p42～48 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>